乳児の向社会性選好と他者へのコミュニケーション行動

生後1年目から2年目の縦断的検討

篠原郁子¹・金重利典²・石橋美香子³・小山悠里²

(¹国立教育政策研究所・²東京大学大学院教育学研究科・³お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

キーワード：向社会性の選好，コミュニケーション，乳児期

Infants' preference of prosocial acts predict later communicative behavior

Ikuko SHINOHARA¹, Toshinori KANESHIGE², Mikako ISHIBASHI³ and Yuri KOYAMA²

(National Institute for Educational Policy Research¹, University of Tokyo Graduate School of Education²,

Ochanomizu University Graduate School of Humanities and Sciences³)

Key Words: Preference of Prosociality, Communicative behavior, Infancy,

目 的

乳児が生後間もなくから、様々な高い社会的認知能力を持つことを示す知見は多い。例えば他者の顔表情や声から感情状態を認識することや、他者の行為の向社会的特徴を選好するという反応(Hamlin et al., 2010)が実験により示されている。そうした実験は、生後わずか数ヶ月の乳児が、実験場面において優れた社会的認識を示すことを明らかにしているが、一方で、そうした能力が、実際に乳児が他者とやりとりをする場面における乳児自身のコミュニケーション行動の産出と如何に繋がりを示すのかを直接に検討した研究は少ない。そこで本研究ではまず、生後1年目に視線計測によって、他者の向社会性の選好に関する実験を行う。その後、子ども自身が実際に他者との言語、非言語双方を用いた社会的やりとりが可能になる生後2年目に、実験者との相互作用場面を観察する。1時点目における向社会性への感受性が、友好的な実験者との遊び場面におけるコミュニケーション行動の産出を促しうるのかを、短期縦断研究によって検討する。

方 法

1時点目の実験協力者：7ヵ月児40名(男児19名、女児21名、平均7.01ヵ月)。向社会性選好の実験：Hamlin et al.(2010)を参考に、箱課題と坂道課題を用いて、主人公の人物が別の人物を助ける場面と、妨害する場面を表した動画(10秒)を提示した(計4場面)。動画の後、援助行為をした主人公(援助者)と、妨害的にふるまった主人公(妨害者)の写真を対呈示した。それぞれへの注視時間を記録し、援助者への注視の割合を算出した。同時に、援助者刺激への反応潜時也算出した。実験には視線計測機器(Tobii i120)を使用した。2時点目の実験協力者：1時点目に参加した親子に、1歳半時点で再度協力依頼をし、15名(男児3名、女児12名、平均16.9ヵ月)が参加した。他者へのコミュニケーション行動の実験：Early Social Communication Scales (ESCS: Mundy et al., 2003)を用いて、実験者との玩具を使った遊び課題の様子を観察、記録した。評定基準に則り、子どものコミュニケーション行動を「共同注意(実験者との対象の共有)」「要求行動」「社会的やりとり(実験者との感情を介したやりとり)」の3側面について得点化した。また、各側面の行動は、子ども側からの始発行動か、実験者の働きかけに応じた応答的行動であるかに分類して得点化した。

結 果

1時点目と2時点目双方の実験データが揃った12名の子どもについて、以下の分析を行った。向社会的な他者を選好する傾向が、実際に他者とのやりとりを行う場面の子どもの行動と関連するのかを検討するため、2時点の実験結果の相関を求めた。その結果、1時点目に、妨害者よりも援助者の方を選好して注視する割合(平均.52(SD=.20)と、2時点目の

ESCS課題における、実験者からの要求に応じる行動(貸して、と言われておもちゃを手渡す、など)の産出(平均12.67(SD=4.91))との間に強い相関が認められた($r=.752, p<.05$)。さらに、援助者刺激への反応潜時(平均1.39, SD=1.11)と、ESCS課題の共同注意に関する応答的行動(実験者の指さしの理解など)(平均49.33(SD=21.98))との間に負の強い相関($r=-.714, p<.05$)、および、社会的やりとりの応答的行動(くすぐり遊びに応じる、など)(平均9.08(SD=4.84))との間にも負の強い相関($r=-.730, p<.05$)が認められた。

考 察

本研究では、生後7ヵ月時に視線計測によって得られた他者の向社会性への選好が、その1年後に子どもが実際に示すコミュニケーション行動と関連することが見出された。2時点目のESCS実験において、実験者は子どもに友好的に働きかけていたが、生後1年目に他者の向社会性的性格に高い感受性を持っていた子どもは、ESCS場面において、友好的な実験者の働きかけにより積極的に応じる行動が認められやすかったと考えられた。なお、向社会性への選好は、後のコミュニケーション行動の「応答的行動」とのみ関連し、「始発的行動」とは関連が認められなかった。これは、向社会性の選好実験が、提示された場面、登場人物の理解と選好を問う受動的な手続きによるものであったため、自分から他者に働きかける始発的行動には影響しにくかったのではないかという可能性が考えられた。また、向社会性の選好実験における援助者刺激への反応潜時が、後の「応答的な共同注意行動」ならびに「応答的な社会的やりとり」と関連していた。反応潜時には、刺激から素早く向社会性的性格を持った登場人物を検出する高い感受性が反映されていると考えられ、こうした特徴が、後の対人やりとり場面において、環境内から他者が注意を向けている事物を機敏に察知し、その情報を共有するというコミュニケーション行動に影響しうるのではないかと推測された。一方、向社会性選好実験における援助者への注視時間の割合は対呈示された刺激を比較して情報を探索する特徴を反映していると考えられるが、これは、後の「要求行動への応答」、すなわち実験者からの時に曖昧な要求行動にも環境内から適切な情報を取得しつつ応じるという行為の産出につながる可能性が示唆された。

引用文献

Hamlin, J.K., Wynn, K., & Bloom, P. (2010). Three-month-olds show a negativity bias in their social evaluations. *Developmental science*, 13(6), 923-929.

※本研究は国立教育政策研究所平成27年度プロジェクト研究「非認知的(社会情緒的)能力の発達と科学的検討手法についての研究」にて実施されたものである。